

◆木型はさまざまな本で紹介されている

改題 「本にのぞく『木型の風景』」 2 ◆

●『職人学』（小関智弘著、講談社、2003年）

世界発信する木型職人 P 228～235

共栄木型鑄造の清水敏夫さん

東京都大田区大森生まれ、

木型業の父の死後 賭け事にはまる、

結婚で生活を改め、大森で木型工場立ち上げ

いすゞの仕事受ける

→神奈川県平塚市に移転

「木型は金型と同様で、ふつう木型用の図面というものはない。製品の図面を与えられるだけである。その平面図から立体的な形をイメージする。そして、その製品を作るためにはどのような木型にすればよいのかを考え、設計して作る。

溶けた湯の流れの具合、金属が冷えることによる縮み代（ちぢみしろ）といったものをすべて勘案しなければならない。

その木型を使って砂型を作り、砂型に湯を流した鋳物工から『こんどの木型はいい出来だ』と誉められ、その製品が設計図どおり完成してはじめて木型職人の腕が認められる」

清水さん

『蟬は七年間土のなかでじっと耐えて、それでも七日間は地上に出られる。ところが木型なんぞは一生土のなかで、世間の人や俺たちの苦勞なんぞは見向きもしない』と自嘲した

木型職人として認められ、その後 メーカーから鋳造もしないかとすすめられる

清水さん

『だんだん認められて、大手メーカーからも仕事がくるようになりました。みんなが嫌がる仕事をやれたからです。でもそういう仕事って、売り上げは少なくても、なんとかなるものですよ」

清水さん

『自分が木型職人なので、鋳造なんてのは重労働なだけだと思っていました。

ところがいざ鋳造をはじめてみると、これもまた奥の深い技能が求められる仕事なんだとわかりました』

「だから鋳造技術への挑戦も続いた。」

清水さん

『いままさに中国の発展の裏には、鋳造生産で世界一、二位を競うところまで来ているという急進的な発展があると思います。日本がその技術、技能を軽視して、鋳造を中国にまかせているといることが、逆に国家の衰退を招いたとも考えます』

「古代の鋳造と木型の技術のことを考えた。

タマゴが先かニワトリが先かの論議になるけれど、最初に木型ができたのではないか、と清水さんは考えるという。

それから、仏像などの肉厚の薄いものの鋳造は、砂が冷えた状態ではなく、砂を温めて鋳造するのが、鋳造技術の原点になっていたはずだ、ということ考えた。

そうでなかったら砂に含まれた水分が水蒸気爆発を起こす。

その砂を温めるという発想をとり入れて、ついに1999年に、砂型による薄肉ステンレス鋼の鑄造方法を成功させた。かつて日本の鑄造学会をはじめ業界では、そんなことができるわけない、と鼻であしらわれていた難題である」

「会社の事務所に、ちょうど扇風機の羽根の形をしたものや、複雑な形をした箱形の、いずれも肉の薄い製品が置いてあった。厚さ3ミリくらいである。従来、3ミリ以下の極薄肉複雑形状の製品を作るには、機械で削り出すか、ある程度の形をプレスやへら絞りで作って、いくつかの部分を溶接して製品にするほかなかった。それを砂型でいちどに鑄造した。

その後 特許取得、中小企業優秀新技術新製品賞受賞……。